

時は過ぎてすでに夜明けであつたが、天皇は昨夜のま
ま南殿に居られた。仲国は返書をさし上げ、小督の心境
を伝えたが、天皇の慕情はいよいよついつつ、夕暮れを
待って具けて参れ、とのことであつた。

仲国は、清盛のことを思うと恐ろしかつたが、君命に
たし難く、夕暮れをまわって牛車を用意して、嵯峨野に赴
き、拒む小督を操々に申しすかして、ようやく車にとり
乗せて内裏につれ帰つた。

小督は内裏の中で、人目につかぬ所に忍ばせ、夜毎召
されてゐるうち、姫宮が一方お生まれになつた。坊門
の女院である。

清盛はどこから漏れ聞いたか、「小督が失せたといい
ことは、跡形もない虚言であつたわい」と言つて、傳り
をもつておびき出し、小督を捕えて尻にして杖ち棄て
た。

小督としては、出家はもとより望みではあつたが、か
ように心ならずも強いられて尻にされ、歳二十三、濃い
墨染にやつ果てて、嵯峨野の奥に住むことになつた。
まことに哀れな極みである。

天皇はこうした事どものため、御悩みつかせられ、
ついに崩御なされた。時に養和元年(二八年)であつた。
以上は、平家物語を字易に畧記したものである。

最後の『想夫恋』について一言したい。手許の辞書に
よると

南奔の相王儉が池を作つて蓮を植え、これを賞した
ので、時の人これを愛でてこの曲(世雅樂の曲)を作
り、相府蓮と名づけた。後、白樂天がこれをまじつ
て想夫恋と書き改めてから、その名になつた。

とある。我が國では平家物語の作者によつて、小督の局

の衣詰に盛り込まれて有名になり、人口に膾炙するに至
つたのである。しかし曲の内容は、相府(大臣王儉)の池
の蓮であり、夫を想ひ恋うては無いことは言うまでもな
い。(おわり)

記録

わがふるさと、元田誌 (14)

室町時代から江戸時代まで

会員 市野瀬 仁

歴史物を流し

大永七年(一五二七)秋、相率礼十代の城主佐伯惟治は、
主家大友の軍勢に攻められ、川又に本陣を置いて寄手の
白井長景の謀略にかかり、相率礼を棄てた。そして日向
境の尾高知の峯で悲壯な最期をとげた。

この佐伯氏に仕えていた市野瀬平左衛門(当時二十八歳)
は、録三百石を賜わり庄官をしていたが、主君を失つた
ので官を退き、一時床水の一瀬に住んだ。その後大坂本
村元田の荒木に住みつき、三代安右衛門(宗祇)までここ
で暮らした。今、道の上の杉木立の中にある古塔群には
年寄くそ見られぬが、連綿と続いた四百数十年の市野
瀬家の、時の長さを感ぜさせてくれる。毎年盆とまなれ
ばこの古墓地は浄められ、先祖のお平いをしてゐるが、
当主市野瀬保彦の家である。館跡はおそらく墓地の左下、
今荒木宗所有の島地であつたと想う。
慶長元年(一五九六)といへば大地震があり、別府湾にお

つた瓜生島が陥没した年におたる。この年七早魃があつたので、五か村(古市・下野・上野・大坂本)の庄官であつた御鱗治郎左衛門は、各村々の長老と協議して雨乞いを行ない、釈魔大神を飛尾山に勧請し、降雨をみたことがあつたと伝えられている。

保考家の資料によると、その子に当ると思われる御鱗庄三郎は、元和八年(一六三三)二十六歳の時、床木・上野・大坂本三か村の庄官であつたが、「故ヤツテ退役シ」市野瀬家六代の子左衛門(宗岸)と、御鱗庄三郎の婿としてその役を譲つた。そこで、当時小崎に館を持つていた御鱗家は元田の地に移り、名を市野瀬治郎左衛門(宗岸)と改称した。その屋敷は、今の御鱗寛平・安藤信喜の屋敷と畑地を含む場所であつた。

御鱗家がいち小崎には、神社横の杉木立の中に、荒木の古塔群と同じ頃と思われる古塔群がある。手を入れてないせいか、あるいはもつと古いのか、荒廢がひどい。おそらくこの古塔群が、御鱗家ゆかりのものであろう。さて、六代治郎左衛門は、荒木から元田に住みついて、すでに三代目におたる。その館は市野瀬文雄所有の焼けた屋敷跡地と、市野瀬善之・市野瀬貞一の屋敷及び畑地を含む地であつたようである。ここで問題になるのは、市野瀬と御鱗との関係と、両市野瀬家との関係である。

○御鱗家と、市野瀬家との関係

残念なことに、御鱗家には紙に書かれた資料は一切ない。頼りになるのは、御鱗家の墓地にある供養塔の文面と、弥生地又の古い家から、御鱗家の名前が若干で出てくることである。この点でとくに注目してよいのは、中国から日本に帰化した切水の陳家(現在は五家)であるが、陳家は秀吉より感状を受けた由緒ある家であるが、その家の資料の中に、

一文祿三年(一六二二)五九四年大坂本に住した四代陳右京建元命は、元田の御鱗治郎左衛門の長女を妻とする云々とある。

また、寛政十二年御鱗庄右衛門は、廣安四年(一六五二)に没した御鱗次郎左衛門の百五十回忌にあたり、その供養塔を建立しているが、その文面の中に、

「……其後寛永年間、故有りて先祖に当たる大坂本庄官市野瀬宇兵衛へ引請候。右に依つて、市野瀬庄右衛門御鱗流を継ぐ」とある。この先祖に当たると、御鱗流を継ぐということと、とくに興味をひくところである。(下略) 御鱗流を継ぐとは、庄屋の役名を継ぐ外にどんなことをさすのか分らないが、両家はよく縁組をしていることは記録にみられる。

○両市野瀬家の関係

市野瀬保考の家には伝わる資料は「市野瀬中興家伝系図」だけであるが、これには詳しい経緯が記録されている。この文書は、十三代宗流右兵衛が天明七年四月、後世のため記述したものである。それによると市野瀬家は、「……勢州安濃津より来り、梅牟礼に就いて仕え、文禄年間まで三百十八年間、この間十五代、それより民間に下り十三代宗流の寛政八年まで二百八十二年にわたる。前後合せて六百六十年にならる云々」(本文大略)とあり、まことに息の長い家系である。

○市野瀬保考家

- 初代 平左衛門威甫
- 二代 新左衛門宗琳
- 三代 安右衛門明安
- 四代 吉左衛門秋白

○市野瀬文雄家

- 初代 御鱗良左衛門宗登
- 二代 平左衛門宗甫
- 三代 吉左衛門宗鏡
- 四代 吉左衛門宗治

とちがっているが、次の五代から十一代までの七代は、次のとおり全く同一人物である。

- 五代 平左門宗説
- 六代 平左門宗説
- 七代 右兵衛宗休
- 八代 右兵衛宗休
- 九代 吉左門宗順
- 十代 右兵衛宗清
- 十一代 宗信四郎兵衛

そして、保考家の資料からみると、十二代から市野順文雄家の方へ庄屋を譲っている。

「十一代 宗信四郎兵衛（宗英）」

天明六年四月卒

寛延元年三十七歳の時、村中騒動のため退役し、時の御代宮下川源五兵衛様御指図に基つき、二男の貞治郎が十五歳の時まで、別家の平兵衛に庄屋を譲り渡し、屋敷を入替り退役後は平左衛門と改名、これ大庄屋源左衛門先祖なり。」

とあるように、それ以後両家の名は別々になつてゐる。即ち文雄家の十二代は平左衛門で、源左衛門は十三代と交つてゐる。

保考家の家系の十二代は大坂詰になり、勤功で帯刀御免をもらい、十三代宗洗吉兵衛は、一時山深い丸梅に住み、やがて今の広瀬に居を構えた。この時、故あって地名を広保と改めたとある。家の裏山には、代々を明記した墓石が竹林の中にある、火伏さんが右手の雑木林に祭られてある。

文雄家の墓地は川向うの竹ノ原におつたが、がけ崩れのため川に流されたものが多く、昔の姿はない。その上昭和三十四年家屋が全焼したので、今は僅かな資料しかない。それでも家系図が残つてゐるのだが、不幸中の幸いである。

今、所領津嶺の土境に達つてゐる、寛延三年（一七五〇）

「蝸蝓衆供養塔」には、田加志弥治、右衛門の名と共に、市野順文雄家の先祖十四代平兵衛と、保考家の先祖が右兵衛の名が刻まれている。

以上のことから資料をそのままにみると、両市野順家は荒木に住み、後元田にも軒をならべて使つていたようである。そして御鱗家も同様、同一家系の出と見ることが正しいと思われる。

いささか個人の家に入入りすぎたきらいがあるが、当時のことを知るには庄屋関係の資料による外ない。また庄屋の存在は、村として非常に大きく百姓の生活にのしかかつていたことでもおぼろし、また今の元田の人々もこの辺の経緯を知りたがっているので、おえて公判することにした次第である。

最後に、養藩体制下最後の、明治三年正月に於ける大坂本組の大庄屋その他をかかけて、一般読者の参考に供したい。

（文中敬称と省略す）

明治三年正月三日 御礼之次第（毛利家之書による）

刀御免之大庄屋

大坂本組

大庄屋 市野順平太郎

宮下小庄屋 源五郎

尺間小庄屋 早助

宇藤木小庄屋 源兵衛

八戸小庄屋 清左門

切畑村組

大庄屋 出納 藤七郎

江良小庄屋 甚右門

堤内小庄屋 要右門

門田小庄屋 与吉

平井小庄屋 平十郎

細田小庄屋 松右門

上野村組

大庄屋 出納 源五郎

上小倉小庄屋 惣助

井筒小庄屋 喜太郎

山梨小庄屋 太郎右門

小四小庄屋 佐平

床木村庄屋 佐右門

同 河野四郎兵衛